

天子は神明と等しくなるうとするのか

——「方擘道德之精剛兮、眸神明與之爲資」——

遠藤星希

【おおよその解釈】

「想西王母欣然而上壽兮、屏玉女而卻慮妃。玉女無所眺其清慮兮、慮妃曾不得施其蛾眉。方擘道德之精剛兮、眸神明與之爲資。（西王母を想ひ欣然として寿を上り、玉女を屏けて慮妃を卻く。玉女は其の清慮を眺せる所無く、慮妃は曾ち其の蛾眉を施すを得ず。方に道德の精剛を擘り、神明に眸しうせんとして之を与て資と爲す。）」

西王母のことを想起して心を喜ばせ、彼女の長寿を祈つて祝杯を挙げ、玉女と慮妃をしりぞけて近づけないようにする。玉女にはその清らかな瞳を見せる場がなく、慮妃もなんとその美しい眉を發揮させることができない。精深奥妙で堅強な道德を、今まさに天子は体得し、天地の神々と等しくなるために、それを手掛かりにするのである。

このうち、「方擘道德之精剛兮、眸神明與之爲資」について解釈する。

【校勘】

『文選』は「擧」を「攬」に作る。『文選』は「睥」を「倅」に作る。

【旧注・旧説の整理】

- (1) 顔師古注引晋灼注：「等天地之付量也。(天地の神靈に等しい思慮である)」
- (2) 李周翰注：「倅、法也。言撮取道德精微之理、法神明以爲資用也。(倅)は手本とすることである。道德の精深奥妙な道理を身につけ、神明に倣わんとして、それを抛りどころとする)」
- (3) Knechtges 訳：「Now He grasps the essential firmness of the Way and Virtue, And equal to the gods, consults with them. (今や天子は、道と美德の精髓とも言うべき堅固さを体得し、そして神々と同等になって、彼らとはかりごとをする)」
- (4) 花房英樹訳：「今や剛強なる道德を心にしつかりと持ち、天地神明に同じくなるうとして、それを模範として行動する」
- (5) 中島千秋訳：「天子は、まさしく、道德の精微剛強な力を持たれ、神々と同様、これを以て行動の指針と定められたのである」

【問題提起】

今回取り上げた二句のうち、前句については諸家の間で大きな説の異同はない。ただ後句については諸説紛々としてゐる。Knechtges 氏は、「睥神明」を「神々と同等となる」、「與之爲資」を「神々と咨(はかりごと)を爲す」と読み「之」を神々の代名詞と捉えている。この「与A爲B」は「以A爲B」と同義であろうから、Knechtges 氏の訳には明らかに問題がある。だが「睥神明」とはいったいどのような意味なのか。花房氏は「天地神明に同じくなるうとして」

と訳出するが、いくら天子とはいえ、神明（天地の神靈の総称）と同等になろうとすることがあるのだろうか。五臣は「眸神明」を「神明にならう」とし、「之（＝身に着けた道德）」を「資（＝抛りどころ・指針）」となすと解釈する。しかし「神明にならう」といっても、どのようなことかは明らかではなく、「之」が何を指すのかについても諸家の意見が割れている。本論では、郊祀における天子と神明との関連性に言及した史書の記述を中心に、用例を挙げて検討し、この二句の意味するところを考えたいと思う。

【用例・考察】

〔用例①〕揚雄「河東賦」〔漢書〕卷八十七「揚雄伝」引に「伊年暮春、將瘞后土、禮靈祇、謁汾陰于東郊。因茲以勒崇垂鴻、發祥隕祉、欽若神明者、盛哉鑠乎、越不可載已。（伊の年の暮春、將に后土を瘞り、靈祇を礼して、東郊に于いて汾陰に謁せんとす。茲に因りて以て崇を勒し鴻を垂る。祥を発し祉を隕ろし、欽んで神明に若ふは、盛んなるかな鑠しきかな、越に載すべからず）」とある。顔師古は「欽、敬也。若、順也。……言發祥降福、敬順神明、其事盛美、不可盡載（欽）は「敬」の義、「若」は「順」の義である。福をおこして天から降ろし、つつしんで神明にしたがい、そのことが盛んで麗しく、記載しつくすことができないうことを言っている。」と注する。これを踏まえて「河東賦」該当部を訳すと、「この年の三月、帝は后土を祭り、地の神を祭つて幸福を招くために、東の郊外にある汾陰に参上した。この機会に、尊号を石碑に刻みつけ、帝王の大事業を伝えて後世に留めようとした。福をおこして天から降ろし、つつしんで神明にしたがうことは、なんと盛んで麗しいことよ、記載しつくすことはできぬ」という意味となる。

〔用例②〕『漢書』卷二十五上「郊祀志」に「洪範八政、三曰祀。祀者所以昭孝事祖通神明也。（洪範八政の三を祀と曰ふ。祀は以て孝を昭らかにし祖に事へて神明に通じる所なり）」とある。顔師古は「祀、謂祭祀也（祀とは、祭祀を

いう。」と注するのみ。本文の意味は『書経』の洪範篇に挙げられた八政のうち、三つ目を祀という。祀というのは、それによつて孝の道を宣揚し、先祖に仕えて神明に通じるためのものである」となる。

〔用例③〕『漢書』卷二十五上「郊祀志」に「天子既聞公孫卿及方士之言、黃帝以上封禪、皆致怪物與神通、欲放黃帝、以接神人蓬萊、高世比德於九皇。(天子は既に公孫卿及び方士の言に、黃帝以上の封禪は皆怪物を致して神と通ずと聞けるに、黃帝に放ひて、以て神人蓬萊に接し、世に高くして徳を九皇に比せんと欲す)」とある。「黃帝より前の時代の封禪はみな怪物を呼び寄せて神と通じていたということを、武帝はすでに公孫卿や方士たちから聞いていたので、黃帝にならつて、神人や蓬萊の土に接し、世に抜きん出て、徳を九皇にならべようとした」という意味である。

〔用例④〕『荀子』「勸學篇」に「積土成山、風雨興焉、積水成淵、蛟龍生焉。積善成徳、而神明自得、聖心備焉。(土を積み山を成せば、風雨焉に興り、水を積み淵を成せば、蛟龍焉に生ず。善を積み徳を成せば、神明自ずから得て、聖心焉に備われり)」とある。王先謙の『荀子集解』に引く楊倞注に「神明自得、謂自通於神明(「神明自得」とは、自ずから神明と通じることを言っている。)」とあり、同じく王先謙の引く王念孫の注に「此言積善成徳而通於神明、則聖心於是乎備也(ここでは、善を積み徳を成して神明と通じれば、かくして聖人の心が備わることと言っているのである。)」とある。両者の説を勘案して訳すと、「土を積み上げて山をつくれれば風雨がおこり、水を集めて淵をつくれれば蛟龍が住むようになる。それと同じように、善を積んで徳を成せば、おのずと神明と通じてそこに聖人の心が備わるのである」という意味となる。

【結論】

管見の限り、祭祀の場において、天子が神々と等しくなろうとするような場面は見当たらなかった。用例①に挙げた「河東賦」は、「甘泉賦」と同じ揚雄の作であるが、そこでも后土の祀りの際に「欽若神明（謹んで神明にしたがう）」と述べられ、天子は神明と肩を並べようとはしていない。ではこれは如何なる状態を指すのだろうか。興味深いのは用例③である。黄帝より前の時代の封禪は、みな怪物を呼び寄せて神と通じていたと聞き、武帝は自分も黄帝にならうと神人に会いたいものだと思つた。この記述からは、古代の祭祀のあり方や神々との関わりがうかがえる。『漢書』「郊祀志」とその元になつた『史記』「孝武本紀」をひもとくと、武帝はひたすら「神明と通じる」ことを願つているが、そのために堅固な道徳を身に付けようなどとはしていない。樂大・公孫卿など次々に現れる方士・術士の言葉に従い、天にそびえる塔を立て、頂上に神人を引き寄せる供物を備える、天下の名山に使者を派遣し、神の足跡を発見したという知らせがあれば、自ら出向く、というようなことを行うだけである。「神明と通じる」ことは、本来道徳とは無縁の神祕の術に属することであり、その目的は神と親しく接見し、福を授けられること、武帝の時代にとりわけ強く望まれたのは、不老長生を得ることであつた。

『論語』「述而篇」に「子は怪力乱神を語らず」とあるように、孔子は神明から距離を置いていた。だが用例④は、儒家がやがてこの領域と積極的に関わつていったことを示している。夥しい数の方士・術士と、その旺盛な活躍ぶりからすれば、「神明と通じる」ことは、支配階層のみならず、広く当時の人々を捉えた願望であつたらう。「積善成徳」すればその願いがかなうと述べて、荀子は儒家道徳の宣伝をしているのである。しかし「孝武本紀」を見る限り、武帝の時代、儒家の目論見は十分成功していたとはいえない。「神明と通じる」ために武帝が行つた種々様々の試みの中で、「徳」が語られることは極めてまれである。しかも用例③では、神と通じるために、道徳を身に付けようとは述べていない。「比徳於九皇」は、神と通じた結果得られるであろう状態を語っているのである。

後掲松浦論文は、儒家の經典に即した郊祀・宗廟の制度は、前漢の元帝・成帝期に始めて取り入れられたもので、そ

れ以前の皇帝祭祀は、不老不死を希求するような個人的な性格が強かったという金子修一氏の説を紹介している。金子氏によれば武帝による甘泉泰一壇の成立には、前漢の皇帝祭祀の中でも、方術的な色彩が最も強く認められるという（後掲『旭卉』の解釈について）【用例・考察】参照）。甘泉宮は、本来神を招き寄せ、神と出会うための場として作られた。揚雄「甘泉賦」も、星にまでも届く宮殿の壮麗さを言葉尽くして描き出し、犠牲を焼く煙を空高く揚げる祭祀の模様をも描いている。これらは「神明と通じる」為の旧来からの手段を描写するものといえるだろう。それに加えて「甘泉賦」は、祭祀が始まる直前に、「方に道德の精剛を撃り、神明に睥ひとしうせんとして之を与て資と為す。」の二句をおいている。これは元帝・成帝期に始まる、郊祀制度の再編に対応するものではないだろうか。道德の精剛を体得することが、神明と通じるための「資」となり得るという認識が成立したことを語っているのではないだろうか。ではこの文脈で「睥神明」は何を意味するのか。徳を積み、神と通じた結果、得られる境地であるから、用例④に即して言えば「聖心焉に備われり」にあたる。用例③の語を用いれば「徳を九皇に比す」となる。しかし「堅固な道德を身に付け、神に等しい徳、あるいは精神を手に入れるために、身に付けた徳を抛り所にする」という文章はいかにも不自然である。道德と神明の関係は、この頃ようやく確立したばかりであった。そのことからすれば、「睥神明」の表しているものは、以前から「神明と通じる」ことの目的であったものと考えすることはできないだろうか。詳しい検討は今後の課題としたいが、神明に等しい幸いを得ること、とりわけ神明と同じく永遠の命を得ることと読む可能性を指摘したいと思う。